

日本キリスト教会大阪北教会

正午礼拝

2005年1月26日

『エルサレムのために嘆く』

聖書 マタイによる福音書 23章 37節～24章 2節 賛美歌 430 433

説教 森田幸男牧師

1月12日の正午礼拝において、今日のすぐ前の23章29節～36節をご一緒に読みました。その時、「今日の箇所は壮大な殉教の歴史を踏まえて語られています。殉教と言うのは、自分の信じる宗教、神のために命を捨てること、或いは命を奪われることです。そういう殉教の歴史を踏まえて、今日の箇所は語られています」と、申しました。

ところで今日の箇所ですが、この23章においてイエス様は、「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ」ということを繰り返し繰り返し語られてきて、その結びになるわけであります。

今日の箇所を読む場合に、23章全体が、実は神の民イスラエルの歴史を振り返りながら語られていることに気付くのであります。今イエス様は眼前にいる律法学者たちとファリサイ派の人たちに語っておられるのですけれども、彼らへの警告ばかりではなく、過去の歴史を振り返りながらこれらの言葉を語っておられるのであります。

37節を見ますと、「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」とあります。この際「エルサレム」というのは、「イスラエルの民全体」に対する呼びかけであります。

エルサレムをイスラエルの都に定めたのはダビデ王でありました。そして今日の24章1節にそのエルサレムの神殿を弟子たちが指さして、「何とすばらしい石垣、建物でしょう」と言っているわけですが、そのエルサレムの都に神礼拝の神殿を建てたのはダビデの子のソロモン王でありました。それは紀元前958年頃と言われております。大体紀元前千年の頃にダビデが王になって、その息子ソロモンが父ダビデ王の志を継いで神殿を建立したのであります。ですから、「エルサレム」はイスラエルの民全体を指すのであります。

このように、「エルサレム、エルサレム」という繰り返しでの呼びかけ、そしてめん鳥が雛を羽の下に集めるように、というこの形容はイスラエルの民に迫っている危険、というよりむしろ国家的危機というべきものを知らせて、そのような危機からイスラエルを守ろうとする神の心をあらわしているのです。神様は預言者を遣わして繰り返し警告され、なすべき事を語られるわけですが、イスラエルの民はそれを無視する。むしろ神が遣わされた預言者、使者を迫害し、石で打ち殺してしまう。そういうことをイスラエルの民は過去において繰り返し、今もなしているのであります。

「めん鳥が雛を羽の下に集めるように」という表現は、旧約聖書に繰り返し使われております。けれどもイスラエルの民は神様の庇護の下に来ようとはしなかつたのです。神様はそのような危機的状況にあるイスラエルの民を、内部崩壊からも外敵による滅亡からも守ろうとされたのですが、イスラエルの民は耳を傾けなかつた。それは少なくともダビデが

エルサレムに都を定めてからでもイエス様まで丁度千年になるのですが、その間ずっとそうであった。そして今もそうだ。そういうイエス様の思いが、この 23 章で繰り返される「不幸だ。不幸だ」という言葉です。これは口語訳では、「わざわざである」となっていました。が、このようなことを続けているならば災い、不幸を自らに招く。そのように諭し続けられたのですけれども、聞こうとしなかったのです。

38 節に、「見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる」とあります。聖書の中でも「見よ」という言葉は、特に注意を喚起するために使われる言葉です。「見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる」というのはエルサレムの神殿とイスラエルの民全体が見捨てられて荒れ果てるという意味であります。忍耐に富み給う神が繰り返して諭し警告されても、それを無視し、内部での腐敗を深めております。イザヤなどは、「神の民と自負しているあなたがたの状態は、あの墮落したソドム、ゴモラよりも質が悪い」とまで言っております。内政が腐敗を深める時、国民はそのような宗教、政治の刷新を求めます。そしてそれが自分たちの手によっては出来ないと思えば、外国の助けを借りてでも国内政治の変革を求めます。こんなことなら外国の支配を受けた方がまだましだというふうな思いにさえなっていくと思うのです。そういう国内状態ならば、異邦の大国はその国を馬鹿にします。たとえ小国であっても、指導者と民衆が一体になって、哲学もあり、或いは信仰も思想もあって、本当に一致団結しているような国は、それを侵すことは出来ない。そんなことをすると、世界の世論が許さないということになります。けれども外部から見ている、そんな独裁は許されないと思うようであれば、そういう国は見下されてしまいます。こんな悪政は滅んだ方がいいとさえ国民自身が望むようになるのであります。昔も今もそのような悪政はあります。正にそういうふうな事がイスラエルの千年の歴史の中では何度もあったのです。そして神ご自身が最後の的に断を下してイスラエルの再建に踏み切られることをなさるわけです。

旧約聖書を見ると、神様はバビロニア帝国を御自分の道具として、イスラエルの刷新のために用いられたことを、聖書は明記しております。そのようにして、ソロモンが紀元前千年に建てたエルサレムの神殿は崩壊したのであります。これは紀元前 587 年のいわゆる「バビロン捕囚」と言われるその時のことであります。それから半世紀経ってイスラエルの民は、今度はペルシャ帝国によって解放されてエルサレムに帰還するわけです。それでもう一回神殿を再建します。それが第二神殿と言われるものであります。これが完成したのが紀元前 515 年のことだと言われます。それからイエス様の時代までこの第二神殿が存続したのです。そしてイエス様誕生当時、ユダヤの支配者であったヘロデ大王がエルサレムの神殿の大改修と拡張工事に着工したのが紀元前 20 年と言われます。そしてその大改修工事が終わったのが紀元 64 年と言いますから、八十年余の期間をかけてエルサレムの第二神殿の大改修工事が行われたのです。ところが、その改修工事が紀元 64 年に終って、その数年後の紀元 70 年にエルサレムはローマ帝国によって滅ぼされ、神殿は崩壊したという歴史をエルサレムは辿っているのであります。

今日私たちはテレビを見ておきますと、ユダヤ人がエルサレムの「嘆きの壁」でお祈りしている姿がよく映されます。あれは今言った紀元 70 年にローマによって破壊されたエルサレム神殿西側の遺構の一部だということです。そこでユダヤ教徒たちは、もう一度神殿が再建されることと、イスラエルの本当の復興、回復を祈る。それが「嘆きの壁」と言わ

れているものであります。そういう歴史をエルサレムの神殿は辿ってきたのです。

今日の聖書の箇所に戻りまして、イエス様は、「お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることのない」と、言われています。これは、「もう一度あなたがたが神の言葉を受け入れるまで、神の祝福を得られない」という意味であります。この39節の二重括弧の『主の名によって来られる方に祝福があるように』という言葉は旧約聖書の詩編118篇26節の引用であります。この詩編118篇は大変すばらしい詩編ですので、ぜひ全体をお読みになるといいと思います。この詩編は正にパウロの詩編なんですね。そしてルターも愛した詩編です。そしてイエス様がここにこのように引用されたということは、イエス様もこの詩編を愛されたということですが、それは破滅的状况から救われた者が、「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」と、このように連呼して、神様のとこしえの恵みと導きに感謝するようにと呼びかけている詩編です。その26節に、「祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する」とあるのです。そして22節のところには、「家を建てる者の退けた石が 隅の親石となった」という言葉もあって、この表現も新約聖書で度々引用されています。それはイエス様のことを指すのです。神殿を建てる、家を建てる時には、この石は使い物にならないとして捨てられる石があります。そして神殿を建てる時、家を建てる時に、役立たずの石として退けられた石が、実は隅の親石なのだ。これはイエス様の十字架の死で、こんな者は役に立たないどころか邪魔だということで捨てられたわけです。けれどもイエス様が本当の神の神殿の土台になったと、そういう意味で118編は予言的詩編でもあるのですが、そこに、「主の名によって来られる方に祝福があるように」という表現があります。この「主の名によって来る者」というのは、神様が遣わされる預言者のことを指します。また、預言者であるイエス様のことを指すのです。そういう預言者、イエス様を通して語られる言葉を本当に聞く、そのようになるまではあなたがたは祝福を受けることができないというのが、この39節の意味であります。

そのようなことをイエス様はおっしゃったわけです。ところが場所を改めて24章に入りますと、「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指さした。」これだけですが、同じ並行記事のマルコによる福音書を見ますと、13章1節、「イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。『先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう』」と言って、エルサレムの神殿のそのすばらしさに驚嘆しています。それを受けてイエス様は、「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と、完全な崩壊を予告しておられるのです。

24章の1節2節を見ますと、イエス様のそばで聞いていた弟子たちは、イエス様が23章で語ってこられたことを何にも聞いていない。何も理解していない。もうこのエルサレムを指導している人々は内部で腐りきっているから、これは今度大揺れが来たら崩壊するのだということ、イエス様は旧約の歴史をずっと念頭に置きながらおっしゃっているわけですが、弟子たちは神殿の外観のすばらしさに圧倒されて、「先生、すばらしいですね」と言っているから、ものの見方が全く違って、弟子たちはイエス様の言われていることを何にも聞いていない、見ていないということが暴露されるわけです。

このようにして、紀元前20年にヘロデ大王が着工し、その息子たちが引き継いで80

年余の期間をかけて大改修工事をしたものは、数年にしてイエス様がここでおっしゃっているように完全に崩壊をしまい、今日に至っているのです。

このようなことを私たちも他人事のように読むならば、これは弟子たちと同じようなことになってしまうと思うのです。これを私たちは自分自身への神様の警告の御言葉として聞かねばならないと思います。聖書を通して神様の御言葉、イエス様のみ言葉を聞いていても、それを信じて喜んで聞き、心に刻み、その御言葉に従って生きるのではありません、私たちが自らに崩壊と破滅を招くこととなります。

この前の日曜日の礼拝説教で「ノアの箱舟」に触れました。「ノアはすべて主が命じられたとおりにした」ということで、あのスケールの大きい箱舟をこつこつと建造していった。それが出来上がった時に大洪水が起こって、神様の御言葉に従った僅かにノアの家族だけが助かったと、そういう警告的な話が出ています。ですから私たちも今即刻取り掛からねばならないし、この御言葉を聞いて、素直に受け入れるということをしなないならば、私たちがまた自らに破滅を招くということになると思います。

今日もマタイによる福音書を読んでいます。この5章6章7章はご承知のように「山上の説教」と言われるものであります。イエス様はそれまでずっと語ってこられて、その末尾の7章24節～27節でこのように言っておられます。「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。(旧約聖書で“岩”というのは、特に詩編でそうですが、これは“神様”を指しているのです。)わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」これは単なるたとえではなくて、正に旧約聖書のイスラエルの民の歴史はそうでしたであろうということ、イエス様は言われているのであります。

先ほど詩編118篇で触れましたが、その冒頭はこうであります。

「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに。

イスラエルは言え。慈しみはとこしえに。

アロンの家は言え。慈しみはとこしえに。

主を畏れる人は言え。慈しみはとこしえに。

苦難のはざまから主を呼び求めると 主は答えてわたしを解き放たれた。」

神様の言葉に聞かないで、苦難のはざまに落ち込んだその時に、主を呼び求めると、主は答えてわたしを解き放たれる。そういう危機的試練を経験し、そこから救い出された者の歌が詩編118篇なのです。

いずれにしても私たちも繰り返し呼びかけられているわけであり、その御言葉に素直に聞き従って歩んで行きたいと、そのように思います。

お祈りいたします。

神様。どうか、あなたの御言葉を素直に、そしてあなたが語り給うことを間違いなく聞くことができるように、私たちを助け導いてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前におささげいたします。アーメン